

二〇二二年度 博物館実習

明治学院校歌を読む

藤村詩としての味わい

日時：二〇二二年九月一二日（月）

九時二十五分～一〇時一〇分

明治學院校歌

人し世し若き生命しあさほらけ
學院し鐘を響きてこれひとし暁うつとが
白金し立子根深く記念樹し立てるはひんよや
緑葉を香ひあわれし青年し思ひつとあ
んせよまふひし友よ新しき時代を待て至
毛る世を遠く望みておのり志し道は開かむ
霄あらずを霄に窮めむ壤あらずを壤も活きむ
あゝ行けたとこへ雄々士のかれ
眼さめよ起てよ畏るる赤く丸

島崎亨村



明治学院校歌 藤村揮毫

明治学院校歌「詩」現代語―意識（私訳）および補注

I 明治学院校歌の成立

i 明治学院前身校の校歌

(参考文献)ほか

ii 明治学院校歌誕生へ

(1) 校歌詩について

3

(2) 校歌楽曲について

4

(3) 校歌の完成と制定

4

iii 校歌成立の時代背景

5

II 藤村作詩校歌詩を読む

i 藤村文学としての明治学院校歌

6

ii 校歌詩を味わう

7

III 明治学院校歌詩を味わって―藤村詩として

13

(明治学院校歌碑)

(参考)

校歌詩の行わけ

I 明治学院校歌の成立

i 明治学院前身校の校歌

現在も歌い継がれている島崎藤村作詩、前田久八作曲校歌以前は、東京一致英和学校時代の宣教師ハワード・ハリスが自らの母校であるアメリカのラトガース大学の校歌をもとに、歌詩の一部を改変した、『隅田のほとり』*Ozuma no Banks of the Old Sumida*が校歌の代わりに歌われていたという。

しかし、独自の校歌を求める機運が強くなり、1906(明治39)年6月、井深梶之助総理の指示を受けて、宮地謙吉教諭が藤村のもとを訪ねて校歌作詩を依頼することになった。

ii 明治学院校歌誕生へ

(一) 校歌詩について

藤村が明治学院を卒業してから、校歌作詩を依頼されるまでは15年が経過していた。

藤村はこの間に、文学界で活動。処女詩集『若菜集』(1897(明治30)年)

を刊行するなどして詩人として「近代詩の扉」を開いた第一人者となっていた。

一方、明治女学校(1892-1893年)、東北学院(1896-1897年)らに小諸義塾での6年間(1899-1905年)の教師生活が続く。この間、藤村の表現手段は詩から小説へと変化していった。作家として出発する構想中の小説を完成させるために家族とともに上京したのは、1905(明治38)年4月末のことだった。翌1906年、藤村は『破壊』を刊行する。

しかし、藤村の私生活では1905年5月には三女縫子を、1906年4月には次女孝子を亡くすという悲嘆の中にあつた。しかも同年6月には長女緑まで危篤入院という状況にあつた。

宮地謙吉が藤村を訪ねたのは、このようなさなかであつた。藤村は「運命は弱き小生等の心を飽く迄も試験せむと欲するものゝ如くに候」と、『破壊』執筆の支援者であつた神津猛へ東京本郷医科大学小児科分室から書き送った葉書(1906年6月2日付)で心境を吐露している。

藤村はひとり宮地謙吉を迎えたと言われる。二人の娘の位牌を前にして、校歌詩作成の依頼を言い出しかねる彼に、藤村はこの他、やさしく親切に接し

て、学院や旧友のことなど自ら進んで語ったという。

その後、話が熟して明治学院のことに及んできたので、宮地謙吉は本題である校歌作詩の依頼を申し出た。それに対して藤村は「御存知の通り、未だ筆をもって働く労働者に過ぎぬ小生、とても堂々たる明治学院の校歌など作るの力なし。然れども学院は吾母校、保育所、我が恩ある所なり、若し予の力にて及ぶことなれば全力を尽くして之を編作せんこと我が義務にして又名誉なり。予快く之を諾せん。幸いに総理閣下以下の意に叶ふ良作を得ば願はくは之を常に歌ふて学生の精神を鼓舞せられんことを希望に耐えず」と快諾した。

井深は藤村の恩師である。藤村は宮地の依頼に謙虚さを見せながらも母校のため、井深のために作詩依頼を諒承した。このとき藤村35歳であった。

(2) 校歌楽曲について

藤村の校歌詩に曲をつけたのは前田久八(1874(明治7)年-1943(昭和18)年)である。前田はピアニスト、作曲家、音楽教育家である。1908年4月に東京音楽学校助教授となり1922年に退職するまで、その任にあった。

(3) 校歌の完成と制定

校歌の完成と制定については、明治学院同窓会百年史によれば、次のとおりである。

校歌の経緯について、鷺山第三郎氏が「學院校歌の由来」(『明治学院高商時報』第四六号、昭和一一年五月二〇日)で、次のように語っている。

その年の十月に〔島崎藤村〕島崎、〔馬場福雄〕馬場の両氏が学院文學会に招かれて各々一場の演説をされているところから見ると校歌はその前後に島崎先生から学院に提供されたものである。

学院では早速時の東京音楽学校教授前田久八氏に作曲を願ひ一月中旬に完成されたものであるが、その歌詞、曲調ともに余りに一般の所謂校歌なるものと趣を異にした『優麗』なるものであったゆゑに、一方では異論が出たそうである。白金學報の美水氏は〔あし〕頻りその弁護に務めている。

結局、校歌の完成は、一九〇六年一月と特定できよう。

一九〇七年校歌の制定

校歌は、その翌年一九〇七(明治四〇)年三月二日神田基督教青年会会館で催された井深総理及びインブリー・バラ・ワイコフ三教授の勤続二五年記

念大祝賀会(『白金學報』第一号・記念号、明治四〇年三月二五日)で対外的に披露されたのであった。

(第七章 明治学院校歌の系譜 第一節 藤村の明治学院校歌と校歌碑『明治学院同窓会百年史』161-162頁)

このような経緯をふまえて、2007年には校歌制定百周年記念の催しが、校歌碑建設七十周年記念と合わせて行われた。百年を超えて歌い継がれてきた、藤村作詩の校歌を今一度、味わってみたい。

iii 校歌成立の時代背景

当時の明治学院をはじめ、キリスト教主義諸学校、国内を取り巻く時代状況はどのようなものであったか。

1884(明治27)年のイギリスとの条約改正調印を機に、その後各国との条約改正へと向かっていった。日清戦争(1884-1885年)の勝利も条約改正を後押しすることにつながった。

条約改正により1889年、外国人居留地は廃止となり、外国人の「内地雑居」が認められるようになった。この時、明治政府が危惧したのは、これを契機として宣教師が国内各地に進出してキリスト教を広めることであった。

当時、大日本帝国憲法の発布(1889(明治22)年)、教育勅語の渙発(1890年)およびその土台としての国家神道政策を進め、天皇主権国家体制確立を図っていた明治政府にとって、倫理思想面で対立すると思われるキリスト教の伸長は見逃すことができない問題であった。日本が思想的に外国に隷従することを怖れたのだった。

こうした風潮の中で、1898(明治32)年8月3日、文部省訓令第十二号が公布される。この訓令により「学科課程ニ関シ法令ノ規程アル学校」、すなわち文部省公認の小学校、中学校、高等女学校においては、課程外であっても宗教教育が禁止されることとなり、法令の規定下にあった宗教系中学校は深刻な影響を受けることとなった。

井深総理は同志社、青山、麻布、立教、名古屋英和と連携して訓令撤回のための運動に奔走し、明治学院にあっては普通学部のみまで1900(明治33)年7

月に徴兵猶予の回復、1901年5月に上級学校への進学資格の回復を得ることができた。1903年5月には専門学校無試験検定校に加えられ、さらに1904年1月、高等学校無試験入学指定校となって、ついに中学校令による中学と同等の資格を獲得し特権の回復にこぎつけたのである。

藤村が校歌詩作詞を依頼される前2年、すなわち1904-1905年に日露戦争が勃発していた。日露戦争の「勝利」により、日本はアジアにおける新興帝国主義国家としての地位を確保し、国際社会全体に対して大きなインパクトを与える国家となっていた。しかし国内的には戦争に「勝利」したものの多くの尊い人命が失われ、多大な負担を強いられた戦争だった。このため講和条約に対する一般民衆の期待は大きかった。ところが講和条件が明らかになるとその内容に対する民衆の失望・怒りが爆発した。日露戦争後、国内はこうして国家と国民の利害関係が一致しないアンビバレントな世情にあった。

このような国内のナショナリズムの高揚、文部省訓令第十二号によって制約を受けた明治学院の教育、藤村のおかれた家庭事情と文学事情(詩から散文へ)の中から、明治学院校歌が生み出されてきたのである。

II 藤村作詩校歌詩を読む

i 藤村文学としての明治学院校歌

「藤村詩が聖書的表現及び漢詩文を多用されていることも周知の事実である。時として聖書的愛が人の恋にすりかえられている例もあるが。聖書を中心とする真剣な詩人の闘い(精神的葛藤)の姿を垣間見ることができよう。「明治学院校歌」も決して学校賛美に終わっていない。学院に多感な青年の時期を過ごした詩人の回想と同時に新しい時代に羽ばたかんとする若者への期待と祈りが籠められている。詩人自身はすでにいわゆるキリスト教信仰(教会礼拝を忠実に守るがごとき)は棄てたかもしれぬが、深く人生を見つめ、絶対者を信じ人間として雄々しく立っていかうとするのは単なるヒューマンイズム以上のものを感じさせる。しかも聖書の詩句の引用は決して正統的信仰を外れるものではない。またこの校歌詩に示される漢語表現はそう多くはないが、その詩の世界を広げて見せるには有効である。」

岩居保久志『島崎藤村と明治学院 「明治学院校歌」の成立とその意義』

(『日本近代文学と明治学院II 島崎藤村を中心に』所収) 21頁 201

ii 校歌詩を味わう

藤村校歌は同時代あるいはその後において数多く作られた校歌の中で、その文言において学校そのものを謳いあげて賛美するものではない。また学生時代の賀川豊彦は、「歌詞」を読んで「神のことが一言もない」と指摘したという。確かに、一見すると宗教色が感じられず、キリスト教主義学校の校歌としては意外な気がする。しかし、藤村は実にさりげなく自然な感じで聖書に示されていることがらをことばにして紡ぎだしている。

このようにして、学生に語りかけるように言葉を紡いだ詩は、藤村の祈りの詩とも言うべきものである。

人の世の若き生命のあさぼらけ(五・七・五)

学院の鐘は響きてわれひとの胸うつところ(五・七・七・七)

白金の丘に根深く記念樹の立てるをみよ(五・七・五・七)

緑葉は香ひあふれて 青年の思を伝ふ(五・七・五・七)

心せよ学びの友よ 新しき時代は待てり(五・七・五・七)

もろともに遠く望みておのがじし道を開かむ(五・七・五・七)

霄あらば霄を窮めむ 壤あらば壤にも活きむ(五・七・五・七)

あゝ行けたゝかへ 雄々しかれ(七・五)

眼さめよ 起てよ 畏るゝなかれ(七・七)

□人の世の若き生命のあさぼらけ

「人の世」は藤村が好んで用いた語彙の一つとされている。「人の世」とは「人生」とも書き替えることもできるが、人生が個人的な生涯を示す語感であるのに対して、「人の世」は、さまざまな人が生きるこの世界、一時代またはそこに繰り広げられる人間模様までも含む語と理解したい。

「若き生命」は、『一葉舟』(1898(明治31)年・藤村第二詩集)にある「白

磁花瓶賦」の中に見る「みどりばのしげきこずゑのしたかげ」に集い、人生を語る多感な若者たちを示すことばと受け取ることができる。

「あざぼらけ」は「朝ぼらけ」で、ほのぼのと夜があけていく様を言い表すことばである。人生の夜明け、始まりという意味である。

□学院の鐘は響きてわれひとの胸うつつころ

学院の鐘はチャペルの鐘と捉えることができる。「青年」(若者)たちの人生の夜明けのはじまりに、「学院の鐘」が「われ」(一人称)と「ひと」(三人称単数が複数)の「胸」に響いてくる。「胸」は「心」に言い換えてもよいだろう。学院に集った「青年」に届いた鐘はどのような音色であったろうか。藤村が明治学院の学んだ若き日に聞いたその鐘の音は、時を経てなお心をとらえて離さない。

□白金の丘に根深く記念樹の立てるをみよや

藤村が学んだ時代、あるいはその以前にも、白金の丘に卒業記念として記念樹を植える習わしがあったようである。藤村は卒業時に楠(犬樟)を植樹した。その木が大樹に成長した様子を「見よ」との命調ではなく、藤村は「見よや」と希望の実現を期待する気持ちを表している。

□緑葉は香ひあふれて 青年の思を伝ふ

「緑葉」みどりばは若葉のこと解され、それは「青春」にもなぞらえることができる。「香ひ」にはは青年からあふれる情熱のようにも解される。青年たちは青春わかもののほとばしる思い、情熱を伝えている。藤村も自らの青春を回顧しつつ、青年たちへの期待を込めたのだろう。

ここまでは藤村の学院への回顧の想いを込めてことばを紡いだと言えよう。

□心せよ学びの友よ新しき時代は待てり

もろともに遠く望みておのがじし道を開かむ
しかし、ここで一転して藤村は「心せよ」と青年たち、自分のあとに続く学びの友に呼びかける。「時代」は「ときよ」と読み、「新しい時代は待てり」と言い切る。この呼びかけは次行以下につなげる、この校歌詩の「分水嶺」とも言うべきものである。

新しい「時代」を切り拓いていくのは、誰であろう他ではない、君たち自身なのだ、このことに「心せよ」、思いを注げと藤村は呼びかける。「青年」の目覚めの

時、次行以下に具体的なことばを紡いで、「青年」への励ましを与える。青年わかものたちよ遠い未来に希望を抱き、歩みゆけ、と。

□霄あらば霄を窮めむ 壤あらば壤にも活きむ

漢語の対句的表現として、この校歌詩の中、最も心に強く響いてくる句である。「霄」は「しょう」であるが「そら」と読ませ「天空」を想起させる。「壤」は「じよう」であるが「つち」と読ませ「地」あるいは「大地」を想起させる。「霄壤」の語はあめつち、すなわち天と地のことであり、それは天と地を創造された神の存在へと思いを向けさせる。

このようにして「霄あらば霄を窮めむ」は、天におられる神の存在、神の啓示にしたがって生き方を求めていこうとする気概を感じさせる。対となる「つちも「土」ではなく「壤」が当てられている。これは農耕に適する「壤」を意味する語である。「壤らば壤にも活きむ」は、人としてこの世に生きる以上、農夫が耕し作物を得る喜びを得るように、与えられた仕事に精一杯汗して働いていこうとする意志を感じさせる。

前行末の「開かむ」と本行の「活きむ」は「む」の脚韻をとっている。古典で助動詞「む」は話し手のあることを実現しようとする意思の表現である。「開けよ」「活きよ」という命令形ではなく、藤村はこの詩を読む者、(校歌として)歌う者、藤村のあとに続く「青年」たちに、「開く」「活きる」という行為を促し、行動を期待する思いをこの句に込めたと思われる。おのがじし道を「開いていってほしい」、壤あらば壤にも「生きていってほしい」。藤村の願いがこの言葉に凝縮され、今を生きる私たちにも、生きることの指針と励ましを与えている。

この藤村の想い、励ましが最後の2行の詩としてクライマックスとなる。

□あゝ行けたゝかへ雄々しかれ
眼さめよ起てよ畏るゝなかれ

この句で注目すべきはすべての句が「命令形」だということである。藤村自らも内に聴いた声であろう、その声を「青年」たちにも発している。

どこへ「行け」というのか明確な指示はない。したがって「行け」は行く先ではなく、行動を起こすことを促すものと考えることができる。学院の鐘の音、学院

で学んだ(学ぶ)キリスト教の精神に促されて行動を起こせ、進みゆけと藤村は励ましを与えているのだろう。

「たうかへ」も何とたたかうのか具体的な相手を示していない。藤村は「戦う」「闘い」とも記さず「たうかへ」と記した。藤村は武器をもっておこなうような「戦闘」を求めたのではないことが理解される。では、藤村は何と「たうかへ」と促すのか。前句にある「新しい時代」をふまえるならば、「社会悪、貧困、不正」をなくすための「たうかい」とも考えられるし、あるいは明治学院のキリスト教主義教育との関連で捉えるならば、霊的、信仰的、思想的な「たうかい」とも考えられる。

いずれしても、武器をもたない「たうかい」であることを心したい。

「雄々しかれ」は聖書のことばと重ねて理解することができる。旧約聖書ヨシユア記に次のような一節がある。「心を強くしかつ勇め汝の凡て往く處にて汝の神エホバ偕に在せば懼るゝ勿れ戦慄なかれ」(約書亜記第1章9節)。ヨシユアはこの言葉に励まされて、ヨルダン川をわたって約束の地に入っていた。

愛する子どもたちを次々に失い、また自らの文学においては詩作が散文へと道

を拓かんとする、自らのたたかいに力を尽くす藤村もこの聖書の言葉に押し出されるものがあつたかもしれない。見えざる力に「雄々しかれ」と励まされて、「新しい時代」に進みゆくのは、時代を越えて、今に生きる私たちも同様であるう。

「眼さめよ 起てよ」もまた、聖書の言葉を重ねあわせて理解することができる。イザヤ書に次のような一節がある。「エルサレムよさめよ、さめよ 起きよ なじ前にエホバの手により忿恚のさかずきうけて飲み、よろめかす大杯をのみ且すひほしたり」(以賽亞書51章7節)

エホバの神に背き苦難と迷いの道を辿るイスラエルの民に神ご自身が「さめよ 起きよ」と覚醒を促していることばである。

「眼さめよ 起てよ」と藤村自身も見えざるもの「神」と言つてよいのか「信頼して生きること促されていたのかもしれない。この句は、時代を超えて私たちへ生きることへの励ましとなつて迫ってくる。

「畏るゝなかれ」と校歌詩は気持ちの高揚を迎えて結ばれる。

藤村は「畏れる」という漢字を用いている。「畏れる」という漢字の本義は「p

「おそれつゝしむ」「かしこまる」という意味とされる。つまり、圧倒的な存在に對して慎んだ態度をとるといふことが字義に適うことになる。

しかし、「畏るゝなかれ」であるならば、圧倒的な存在である方をおそれない生き方、換言すれば、この世的な歩みを勧めているようにも読み取れてしまう。では、藤村はキリスト教でいうところの天地万物の創り主であるお方に対して慎んだ態度をとる必要はないのだと言って、この校歌詩、青年たちへのメッセージを締めくくろうとしたのだろうか。そうであるならば、これまで藤村が紡いできた言葉と矛盾をきたしてしまふ。

「恐れる」と「畏れる」は、明確に言葉の持つ意味合いに違いがあり、使い分けを行うことができる語である。藤村ほどの言葉の「使い手」が用法を誤るとは考えにくい。藤村は何故、「畏れる」を用いたのだろうか。藤村の意はどこにあるのか、それを探るのはなかなか難しい。

すでに引用した岩居保久志は『邦訳聖書で多用される懼^(恐)字とほとんど同義である。「畏るゝなかれ」は唯一の神を信じ信仰的な生き方をせよ、また神ならぬものを神とすることなく、理知をもって生きよ』という意に解したい。』と

述べている。(前掲書 29頁)

同様の見解を平林武雄も示している。『この点に関しては、平林武雄が卓見を示しており、校歌の最後の二行にはイザヤ書の三五章四節「雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる」(新共同訳)があるいはコリント人への手紙(一)の一六章一三節「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。

「コリントの信徒への手紙」

雄々しく強く生きなさい」(新共同訳)のことばが暗示されていると指摘している。藤村は、実にさりげなく自然な感じで、聖句を歌詞に織り込んでいたのである。』(第三章 音楽と明治学院(明治編) 第三校歌《人の世の》の誕生 『明治学院百五十年史 主題編』 138頁)

岩居、平林に共通するのは、「畏れる」という語の本義からは外れることにならぬが、これまで藤村が紡いできた言葉をふまえて、さらには聖書の言葉に照らしながら、人生の困難な場面に直面する時、恐れず行け、何故ならあなたを守れる神がともにおられる、そのことに「心せよ 学びの友よ」とメッセージを私たちに遺しているのだという解釈だと思われる。

このように藤村作詞の校歌詩を味わうとき、これを藤村による一篇の信仰詩として読み解くことができるようにも思われる。

〔コリントの信徒への手紙第一〕

なお最後の2行について、『新約聖書』コリント前書第十六章十三節の「目を覚し、堅く信仰に立ち、雄雄しく、かつ剛かれ」との類似を説く説もある(『齋藤勇著作集』)。近似した表現をさがすことにどれほどの意味があるのか不明ながら(日露戦争という時局柄、このような勇ましいことは巷にあふれていたとも考えられる)、『破戒』にも「社会(よのなか)に容れられない父が丑松に与えたことばとして「行け、戦へ、身を立てよ」と書くように、過酷な私生活の直中にある藤村にとって生きることばは自他との戦いであったということを理解すればよいものだと思われる。」との嶋田彩司の指摘もあることも示しておきたい。

(嶋田彩司『明治学院校歌と島崎藤村——1906年の緑葉——明治学院大学教養教育センター附属研究所年報 78頁 2015年)

III 明治学院校歌詩を味わって—藤村詩として

明治学院校歌の「歌詞」を読むとき、既述のとおり誰もが指摘するように「明治学院」という学校名は登場せず、学院礼賛するようなことばも用いられていない。さらには、賀川豊彦も「指摘」したとおり(キリスト教の、あるいは聖書が指し示す)「神」ということばも用いられていない。明治学院校歌の「歌詞」として読むならば、いささか校歌「詞」らしくぬ「歌詞」であるともいえよう。

しかし、これを「詩」として味わうならば、その中に藤村という人物の深い思索を読み取ることができないのではないだろうか。

藤村は1888(明治21)年、17歳の時に木村熊二から洗礼を受けた。しかし1892年、明治女学校の英語教師となるも教え子である佐藤輔子に愛情を寄せるが、婚約者がすでにいた佐藤輔子との恋愛はあきらめざるをえず、1893年には明治女学校を辞することになった。そして同時期に教会から離れ、後年も教会に戻ることはなかった。従って藤村が教会に籍を置いた期間は17歳から22歳の間というわずから5年という短いものであった。藤村のキリスト教の棄教とみなされる出来事である。

このような次第で、藤村が校歌「作詩」の依頼を受けた時は、すでに教会生活から離れていたのだが、この校歌詩を読み味わうとき、キリスト教(的)な思想を垣間見ることができるといえる。このことを岩居保久志は前掲書のなかで次のように述べている。『藤村の教会生活は明治二十六年に終わったかもしれない。しかしそれがキリスト教への決別、棄教を意味するものではない。ある時、点^とされた信仰の火は人の側から吹き消されるものではなく、弱々しくみえようとも燃えつづける例をここにみる。』(前掲書37頁)

藤村は井深梶之助を「井深先生」と呼んでいる。井深に対する敬愛の想いは終生続き、井深の葬儀に際しては自らも病がちであったにもかかわらず参列した。藤村の内に井深の教えは、心に留まり続けたのであろう。キリスト教を「棄教」したように見えた藤村ではあったが、井深は終生、その信仰を導き続ける信仰の師、あるいは父と呼ぶにふさわしい存在であったと言えよう。

そのような「師」であり「父」である井深から明治学院校歌「詩」の作詩を依頼された藤村は、明治学院で学んだ若き日のことを振り返り、自己と向き合っ
て、ことばを紡いでいったのではなからうか。

藤村は直接的に神のことを語ることはせずとも、そのうちに、見えざる神との関係、その関係から生まれる真実なものへの希求となることを紡ぎ出した。このことばが『明治学院校歌』という果実である。

藤村は母校と学生に寄せる想いや期待を九行の詩に凝縮した。それは、藤村の内なる声、ことばとなって昇華したものであろう。このように考えるならば、明治学院校「歌詞」は、校歌のための「歌詞」ではなく、藤村という詩人のことばの結晶であると言ってもよいのではないだろうか。

かなり独断的表現を許してもらえば、明治学院校歌「詩」は藤村詩の金字塔と言っても良いのではないか。それは「芸術性が高い」という一般的表現の枠にはおさまらないものである。

本資料では意識的に藤村校歌「詞」ではなく、「詩」との言葉を用いてきた。

「詞」の英単語は「words; writing; lyrics」となるが、「詩」は「poem; verse; poem; verse」として取り組む試みを強く意識したからである。

折しも2022年は島崎藤村生誕150周年のメモリアルイヤーである。この節目の年に、「明治学院校歌」を歌う校歌ではなく、藤村文学としての「詩」として今一度、じっくりと味わうことは意義のあることと思う。

今回の博物館実習で藤村の校歌詩を取りあげ、「明治学院校歌を読む 藤村 詩としての味わい」とした所以はここにある

この百年を超える昔に藤村が伝えたようとしたメッセージから、今を生きる 私たちは何を受け取ることができるだろうか。静かに耳を傾けたい。

(明治学院校歌碑)



明治学院校歌記念碑はチャペルの西側、高校校舎との間にある。



(参考)校歌詩の行わけ

左記に示すように十七行に分けて記すこともある。

人の世の

若き生命のあざぼらけ

学院の鐘は響きて

われひとの胸うつところ

白金の丘の根深く

記念樹の立てるをみよや

緑葉は香ひあふれて

青年の思を伝ふ

心せよ学びの友よ

新しき時代は待てり

もろともに遠く望みて

おのがじし道を開かむ

霄あらば霄を窮めむ

壤あらば壤にも活きむ

あゝ行けたゝかへ雄々しかれ

眼さめよ起てよ

畏るゝなかれ

学院で配布する校歌譜面では十七行わけを用いている。

明治学院校歌「詩」現代語・意識(私訳) および補注

迎えようとする新しい時代の始まりに立っている青年たちよ

学び舎の鐘の音が心を揺り動かす

白金の丘で大樹に成長した 記念樹を見上げてみよ

若葉の生い茂るすがたは 君たちの想い伝えるかのようだ

学びの友よ これらのことを心にとめてほしい

今 君たちの前に 君たちが切り拓くべき未来が待っていることを

一人ひとりが その未来を見据えて歩み

その道を切り拓いてほしい

目を天に向け 真理を追い求めて生きよう

凍土も耕すように 実直に自分の人生を耕して生きよう

さあ 一步を踏み出すのだ ひたむきに生きよ

絶えず己を自覚し また己を律し おそれずに歩みゆけ

【補注】

言葉は時代の中で生きたものである

藤村作詩の明治学院校歌詩は結構勇ましい語調で綴られており、意識的に猛々しい言葉を選んだのかもしれない。これもまた（藤村校歌）詩の特徴であり、当時の男子校かつその校風をも表しているともいえよう。

また、この「詩」は藤村が生きた時代の価値観の反映、今の価値観からすると時代錯誤かもしれない。でもあり、あるいは藤村は藤村、明治時代を生きた、その時代の人々の価値観の現れでもあることにも心に留めておきたい。

このように考えるならば、言葉とはその時代に中に生きるものである。例えば、現代においては「不快語」「差別語」と呼ばれる言葉を思い起こしてみるとわかりやすい。差別は許されるべきものではないが、その当時の言葉に付随した概念をきちんと理解し、知っておくことは重要である。そのことが差別的「本質」を知る助けとなる。

先に、藤村校歌「詩」が生まれた時代背景を述べた「5頁」。校歌成立の時代背景。なぜ藤村が猛々しい言葉を用いたのか、「新しい時代」という感覚を持ったのかも、時代背景を知ると理解することができよう。こうしたことを意識しつつ、意識したものが前掲の「詩」であるが、歌「詩」の受け止めは、それぞれに異なるし、また社会の変化、時代の変化の中で変わるものである。私訳とする所以はここにある。受講生の皆さんも、藤村の「詩」を読み味わって、どのように受けて止めたのだろうか。

みなさんにも各自の感性で校歌「詩」の私訳を表現してみることを、お奨めしたい。

(参考文献)

明治学院同窓会百年史編纂委員会『明治学院同窓会百年史』2008年

明治学院百五十年史編集委員会『明治学院百五十年史』2013年

明治学院百五十年史編集委員会『明治学院百五十年史 主題編』2014年

岩居保久志『日本近代文学と明治学院Ⅱ 島崎藤村を中心に』2017年 一粒書房

村上文昭『藤村と明治学院校歌』島崎藤村研究 第二五号 1988年

加藤拓末『明治学院校歌の現存最古の印刷楽譜―校歌オリジナルの姿を追って―』

明治学院大学大学院文学研究科芸術学専攻紀要 バンダライ第8号 2009年

嶋田彩司『明治学院校歌と島崎藤村 ―1906年の緑葉―』

明治学院大学教養教育センター附属研究所年報 2015年

口謝辞

明治学院高等学校岡村淑美教諭に、有益なアドバイスを頂いたことをここに記して感謝したい。

口藤村揮毫校歌「詩」画像提供：明治学院大学図書館



島崎藤村近影

明治学院歴史資料館デジタルアーカイブズ

ガラス乾板コレクションより

作成:2022年8月26日